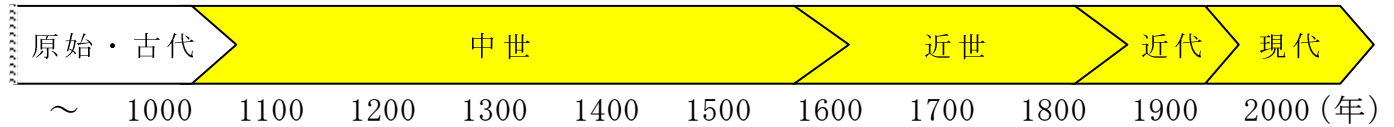
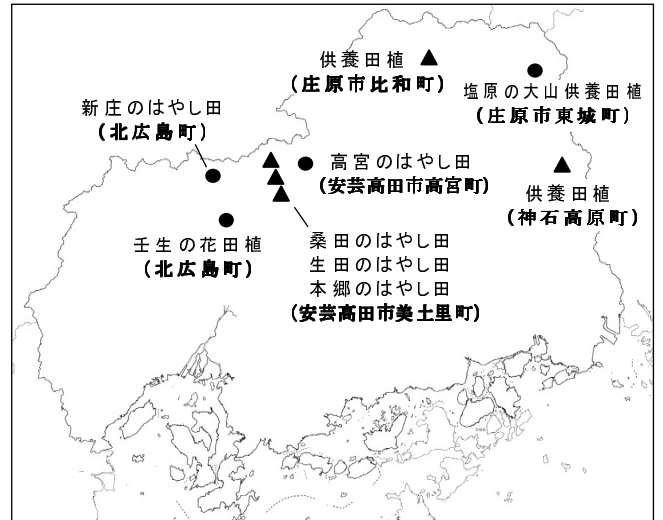


8 日本の伝統芸能とひろしま～^{みぶ}壬生^{はな}の花田植^{だうえ}～



1 伝統的な田植行事はどのような形で現代に残っているのでしょうか？

稲作は、主食である米を作るというだけではなく、日本の民俗や風習にも大きな影響を与えてきました。田植は、その中でも特に重要視され、労働であると同時に神事でもありました。その田植で「楽器を伴奏として、それに合わせて苗を植える」という田植行事が古くから行われていました。その行事は「田楽」とよばれ、その年の豊作を田の神に祈ることを目的としていました。それが、次第に「芸能としての田楽」と「田植としての田楽」に分かれていき、「芸能としての田楽」は踊りの要素が強くなっていきました。



県内の伝統的な田植行事
(●:国重要無形民俗文化財 ▲:県無形民俗文化財)

一方、「田植としての田楽」は失われていった地域もありますが、中国山地などでは、先人の努力によって受け継がれてきました。稲作において負担の大きい田植は、昔は地域や村で支え合っていました。その際に行われていた旧来の神事のみならず、苦しい田植において楽しく作業するためや、作業効率を高めるために、太鼓や笛に合わせ、唄を歌って苗を植えるという形式は、中国山地など一部の地域で受け継がれています。広島県内では北部を中心に継承されており、中でも、北広島町に伝わる「壬生の花田植」は、2011（平成23）年にユネスコの無形文化遺産に登録されました。



「壬生の花田植」は、現在にどのように継承されてきたのでしょうか？どのような特徴のある田植行事なのでしょうか？

2 「壬生の花田植」は、現在にどのように継承されてきたのでしょうか？

県北西部の壬生（北広島町）は、田植行事が盛大に行われてきた地域です。このような行事は明治時代には、「大田植」や「花田植」などとよばれるようになっていました。この頃になると、行事の目的に地域の實力者が自分の力をアピールする場という要素も加わり、地主などが自分の持っている最も大きな田で、地域の人を雇って華やかに田植行事をするようになりました。



「壬生の花田植」の様子

しかし、花田植が行われる機会は徐々に減り、昭和になるころには地主による盛大な田植行事は行われなくなっていました。

そこで、伝統的な行事が見られなくなっていくことを惜しんだ壬生町（当時）の商工会の人々が、地域の詳しい人の助けも借りて、地域の行事として継承していこうと「壬生のはやし田」として再興しました。その後、1975（昭和50）年には県の無形民俗文化財⁽¹⁾に指定されました。一方、隣の川東地区でも同様に「川東のはやし田」が再興されており、壬生より10年以上前に県の無形民俗文化財に指定されるほど、昔の形を残す貴重なものでした。

翌年の1976（昭和51）年、川東・壬生の両地区のはやし田が合同で国の重要無形民俗文化財として指定されることとなり、「壬生の花田植」となりました。現在でも毎年6月の第一日曜日に、壬生に特設してある田で行われ、花田植を行う人は百人近くにもなり、当日は多くの観光客が集まりにぎわいます。そして、その継続的な活動が評価され、日本の稲作に関わる文化を継承しているものとして、ユネスコの無形文化遺産に県内第一号として登録されたのです。

区分	名称	記載年	
重要無形文化財	芸能	能楽	2008
		人形浄瑠璃文楽	2008
		歌舞伎	2008
		雅楽	2008
		組踊	2010
	工芸技術	小千谷縮・越後上布	2009
石州半紙		2009	
結城紬		2010	
重要無形民俗文化財	風俗慣習	日立風流物	2009
		京都祇園祭の山鉾行事	2009
		甑島のトシドン	2009
		奥能登のあえのこと	2009
		壬生の花田植	2011
		和食	2013
	民俗芸能	早池峰神楽	2009
		秋保の田植踊	2009
		チャッキラコ	2009
		大日堂舞楽	2009
		題目立	2009
		アイヌ古式舞踊	2009
佐陀神能	2011		
那智の田楽	2012		

国内のユネスコ無形文化遺産
※2013（平成25）年12月現在

3 「壬生の花田植」にはどのような特徴があるのでしょうか？

「花田植」には効率よく田植えを行う工夫がたくさんあります。田植え全体を仕切る人を「サンバイ」とよび、田植唄を歌って「早乙女」とよばれる苗を植える女性達の作業のテンポを合わせます。田植唄は多数あり、サンバイはユーモアのある唄や恋愛の唄なども歌い、田植えを楽しくできるように配慮します。田植唄に合わせて合奏をするのが「囃し手」です。大太鼓・小太鼓・笛・手打鉦の4種に分かれており、笛は唄の旋律をとり、小太鼓と鉦は拍子をとります。人数の多い大太鼓は唄によって打ち方が決まっております。バチを回したり投げたりして盛り上げ、この行事の芸能としての側面を担います。他にも、田植えの前に田を掻く「飾り牛」にも昔ながらの作法があり、中世・近世からの田植行事を守り続けています。

参加者は地元の人で、練習を重ねて磨き上げた技能を披露し伝統を継承しています。現在は農作業で牛を使うことはほとんどなく、飾り牛となる牛の確保が困難になってきていることなど開催には苦労があります。しかし、昔の人々の稲作での苦労や工夫、歴史的な深い繋がりを現代に伝える国際的にも価値ある伝統芸能として、大切に守られています。



「飾り牛」

4 「壬生の花田植」はどのような流れで進むのでしょうか？

「壬生の花田植」は次の流れで、およそ半日をかけて行います。

○道行^{みちゆき}

参加者は、田から少し離れた場所に集合・準備し、移動します。先に飾り牛が行き、続いて進む田楽団は道行の途中で、囃子^{はやし}を演じます。



飾り牛の道行



田楽団の道行

○代掻き^{しろかき}

先に到着した飾り牛はさっそく田に入り、代掻きをします。田をしっかりと耕し、荒れた田の表面は「エブリ」という道具を使ってならします。



代掻きの様子



エブリを使う様子

○田植え

いよいよ田植えが始まります。サンバイ・早乙女・囃し手が一体となって整然と華やかに田植えを行います。



田植唄を歌うサンバイ



囃し手の演奏



早乙女による田植えの様子(◇)

(※写真はすべて北広島町教育委員会提供(◇を除く))



「壬生の花田植」は、どのように継承され、どのような特徴があるのか、調べたことや考えたことをもとに自分の言葉でまとめてみましょう！

【注】

- (1) 文化財とは歴史の中で生まれた貴重な財産のことで、民俗文化財はその中でも人々の暮らしに関係するものをさす。建築物や絵画などの物品を「有形」、踊りなどの技術を「無形」と区分する。

【もっと調べてみよう！郷土の歴史】

- 県東部の「供養田植」についても調べてみよう！
 - ・県西部の田植行事との違いは何でしょうか。
- 稲作に関する行事には他にどのようなものがあるか調べてみよう！
 - ・身近な地域の祭りなどで、稲作と関係あるものはないでしょうか。

◇芸北民俗芸能保存伝承館

住所：山県郡北広島町有田 1234 TEL：050-5812-5088 HP

◇広島県立図書館

住所：広島市中区千田町三丁目 7-47 TEL：082-241-4995 HP

【もっと知りたい！郷土の歴史】

ひばこうじんかぐら 比婆荒神神楽（庄原市）

広島県は、秋の収穫を祝う祭りでよく見かける「神楽」が非常に盛んな地域の一つで、各地の「神楽団」など神楽を受け継いでいる団体数や神楽の種類は、全国屈指の多さです。

広島県の神楽は、地域によって演目や舞い方などに違いがあり、いくつかの種類に分けられます。この違いは、県内各地の神楽が、隣接する他県の神楽の影響を受けたことで生じたものです。例えば、県北西部の安芸高田市や北広島町を中心とした地域では、島根県西部の石見地方の神楽が取り入れられ、テンポが速く華麗な舞の「芸北神楽」が発展しました。また、県北東部では、島根県東部の出雲地方や、岡山県西部の備中地方の影響を受けて発展した「比婆斎庭神楽」や「比婆荒神神楽」が受け継がれています。

このうち、比婆荒神神楽は、庄原市東城町や西城町で受け継がれてきたもので、江戸時代以前に遡る歴史をもつとともに、神楽本来の姿を伝える神楽として、神楽では県内で唯一、国の重要無形民俗文化財の指定を受けています。7年に一度、13年に一度、あるいは33年に一度というように、それぞれの集落で決められた一定の年ごとに奉納され、その間に亡くなった祖先の霊を浄土に送るために、藁でつくった大蛇を使って「竜押し」とよばれる神事を行うといったような特徴があります。

現在、非常に人気を集めている「オロチ退治」や「鬼退治」を物語にした神楽だけでなく、県内には地域ごとにさまざまな種類の神楽が受け継がれています。広島県は、神楽の宝箱なのです。



広島県の神楽の分布



比婆荒神神楽の猿田彦の舞
(広島県立歴史民俗資料館提供)



比婆荒神神楽の竜押し
(広島県立歴史民俗資料館提供)